

公開講座 新田義貞から 37 代目による「太平記ゆかりの地・處澤」

——『ほろびしものはなつかしきかな』——

2018-9-7

西脇 英夫

■実施日時: 2018-9-6(木) 13:30~15:45

■場所: 中央公民館 学習室 8・9 号室

■参加者(入場者): 60名

■講師:新田隆昭氏 パワーポイント映像資料担当 中村真一氏

■講座内容

9 月 6 日表題の講座を開きました。先立つこと4か月メール返信で快諾、準備にかかる旨に接し、8 月初頭会の小川代表とともに、はじめて、講師の新田隆昭さんと新田さんのお知り合いで資料のパソコン取り込み、編集を担当くださる中村真一さんにお会いし、講演内容を打合わせました。

パソコンメールでのチラシの配布の直後から、野老澤の歴史をたのしむ会の会員から参加の申し出がつづき、定員60名の残る30席は公募することとしました。結果、心配をよそに多くの方が関心を寄せてくださり、お断りするのに大奮の状況で当日を迎えました。



講師紹介、講座中の講師 新田隆昭氏 映像ご担当中村真一氏

講座

豊富な資料から厳選された60枚のライドを駆使して新田義貞とその子三兄弟に関しての深い造詣になる講演は、所沢の地名、新光寺、実蔵院、薬王寺、金乗院などの古刹の名がポンポン飛び出し、時に、詩吟を混えての熱演でみなさんの目はスクリーンに釘づけでした。

われらが郷党山口氏も武蔵七党の金子氏、村山氏の新田勢側に加担し、幕府軍と激突の小手指ヶ原、分倍河原では一進一退の壮烈な戦いをしたそうです。稲村ヶ崎で義貞が黄金の太刀の投海をへて鎌倉幕府を滅亡に追い込むくだりや、建武の中興のあと後醍醐天皇に請われるも北国へ落ちた太平記のヒーロー・新田義貞が武運つたなく、燈明寺躰(とうみょうじ(なわて)の戦いで、敵の矢の乱射に倒れて泥田に臥し、矢面に立ちかばう部下がつぎつぎと身代わりになり、ついに眉間を射貫かれ壮烈な自刃するくだりは、浪曲の一節を聴いているような心持ちでした。



太平記絵巻（江戸時代の作）

右側の立っている武将が **新田義貞**、太平記のと名付けられたのは戦乱の世から平和を願って



新田家に代々伝わる 下文

講師に実物をご提示いただいた。
下文は 11～13 世紀に多用された下達文書

隠岐の島へ護送される後醍醐天皇が、児島高德の桜の木の幹を削って記した「天 句踐を空しゅうする勿れ 時に 范蠡(はんれい) 無きにしもあらず」の墨跡に涙する場面も有名ですね。ご高齢の講師が吟詠された眉雪の老僧が説く漢詩「芳野懐古」の物語る南朝の悲話は、新田家を継いだ義貞の三男・義宗の子と孫が、観応の擾乱で七里ヶ浜に斬首され、ここに新田氏の嫡流が断たれるという新田一族の運命と重なり、“寂寥”の感を深くしました。

旧鎌倉街道の上道(かみつみち)の結節点であり東西への主要街道にもつながる“われらが處澤”はこの時期、馬蹄の響きが絶えなかったに違いありません。

みなさまは今回の「太平記ゆかりの地・處澤」の講座をどのようにお感じになりましたでしょうか。

八国山の将軍塚を、柳瀬川にかかる勢揃橋を、小手指が原や久米川の古戦場を歩けば、眈(まなじり)を決して参集し、はかなくも散った武者の姿や兵馬の嘶き、軍兵の闘の声、撃剣の音や、大地を動かす鯨波が想起され、みなさまを太平記の世界へ導いてくれるでしょう。

「かたはらに 石塔板碑 かたるらく ほろびしものは なつかしきかな」(拙詩で、本歌は若山牧水の「かたはらに 秋草の花 かたるらく ほろびしものは なつかしきかな」です)を堪能した2時間でした。

講座に聞き入る 参加の皆さん



それにしても講師の新田さんが代々受け継がれまた、ご自身が収集なさった貴重な資料は今後どうなるのでしょうか。 資料館、博物館を持たない所沢市民に伝え残すべき文化遺産と語り継ぐべき精神的風土の行方を”秋の心”「愁」える一人です。

本公開講座の実現を支えてくださったスタッフのみなさん、お世話様でした。

講師の新田隆昭様、資料編集の中村真一様 ありがとうございます。
またの機会に、なつかしき世界へ連れて行ってくださるようお願いします。

—以上—

付記：配布資料 野老澤の歴史をたのしむ会 公開講座版「太平記ゆかりの地 處澤」6 p 資料
(新田隆昭氏・中村真一氏共同編集・・・「名人・達人に聞く会」配布物と同一編集)